

始まりの景色

若狭陽太

湿ったくるみで包まれる

パンタグラフを伝う電流を知らず

それでも欠伸と共に飲み込まれた空間の中に

目的地に着くまで以外の意味を求めている

早く着いたって別にすることもないけど

眠っている間に到着するのは勿体ないものだ

閉まる扉が有限を告げ

手段が生んだ有閑を捏ねて

手持ちぶさに

昔のことを思い出してみたり

ポケポケでカードをしばいたり

好きだったバンドの曲を聴いたり

座席にはまだ前の人の温もり

握り直すプラスチックを繋ぐ革

窓にはただ縁のないビルが流れるばかり

途中で降りる人もあった

またねと手を振り背中を見送って

その他の大勢に紛れてやっと

思い出の影でアルバムを作る

寂しさを告白し合うことに慣れてから

寂しさでは孤独を表せなくなった

すれ違う蛇がとぐろになって

もうとうに倦んでいるのに
足が動かず気恥ずかしい

降りた瞬間にそれまでのことは忘れて
エスカレーターで改札に向かう

階段を上る人を追い越す

今度はこれが私を運ぶ

緩やかに滑る繰り返し景色

生まれてきてくれてありがとうと告げる

愛は湿ったくるみに包まれる